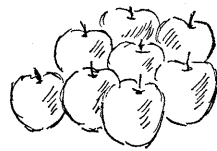


# 現職研究レポート

## その三 A幼稚園の場合

太田留美



千葉市轟町にあるA幼稚園の公開観察日は昨年の二月十三日であった。都心から二時間足らず電車に乗れば、これ程まで街のたずまいも変わってくるのかと驚きながら、A幼稚園を訪ねた。門を入ると松の木があり、黒く肥えた昔ながらの地面があつて、自然で素朴な雰囲気が漂っていた。

この日、観察者たちが眼にしたものは、年長児は年長児らしく育ち、四歳児は四歳児ながらに成長して、それぞれの遊びを遊んでいる子ども達の姿であった。

このように落ち着いた子ども達の遊ぶ姿が見られるのも、M先

生の話によると「自由な形態に生活を変えていくのに、保育観を揺さぶられ、揺さぶられしながら、思いきって形を崩し、模索しながら歩んできて、やっと二年前から、子ども達も先生方もいい感じで生活できるようになった」と言うことである。

そうしたいい感じの保育の中で、子どもと保育者の出会いがうまくいっていないのか、関わり方に不安を抱かせられる子どもがいるという事が問題として取り上げられた。

そこで、K君とU君に焦点があてられることになった。

観察者の眼にも、K君は動きが激しいために、ひときわ目立っ

た子であり、反対に、U君は動きが少ないために、気になる存在であった。

二月二十日、現職研ゼミにおいて、U君とK君のケース報告をもとに話し合いが行なわれた。

まず、U君との関わり方について、担任のT先生の報告を掲げよう。

## ■U君のこと

U君は表情も乏しく、保育者との会話もほとんどない。友達遊びを遠くから見ていると誘われると逃げ出してしまふ。

そのような園生活が、本当に楽しいのかなといつも心配になる子である。保育者として、どう接してあげようか。もっと楽しくうにさせたい。もっと活発になってほしいという思いをいつも抱いてきた。反面、全体で動くような時、礼拝への参加、お弁当、帰りのしたくなどの時は、皆と上手に出来るので、ついU君の事を見落してしまいがちであった。

最近、U君が仲良しの友達と飛行機づくりに夢中になり、U君の新しい段階が感じられるようになってきたが、それをどう受け止



▲ 飛行機を作っているU君

めてどう接する事がいいのか、その手だてがわからないでいる。

T先生は、U君に対して、いつも何かしてあげなければと思いつつ、どのように関わっていけばいいのかわからないというのが悩みであった。そういう時、U君を追っていた観察者から、U君にはU君の表現方法があり、又、遊びの中でも、U君なりの楽しみ方を持っているようだという指摘があった。

T先生は、その指摘を受けて、「いまままで、一方的に、自分の中にある園生活のすごさ方をU君に押しつけようとして、U君

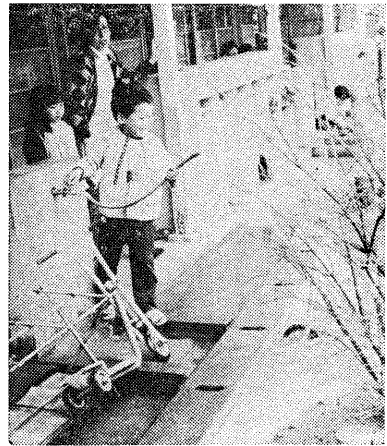
の実態を見落していたように思う。教師会の中でも、「一人一人の子どもの違いを認めよう」と話し合っているが、実際の子どもの触れ合いの中で、その子のその子らしさを、なかなか認められないでいる事が多かった。U君との出会いの中で、あらためて、考えさせられた」と話を結ばれた。

さて、次は、K君について、担任のN先生の報告を掲げよう。

## ■ K君のこと

これまで、「おはよう」と言えば、笑顔で「おはよう」と答えてくれる。「お部屋に入りましょう」と言えば、素直に入ってくる。そのような子どもとの生活が多かった。そのような中に、K君が入園してきて、出会いからびっくりさせられてしまった。K君は、私たちの思いどおりに反応してくれない子どもでもあった。K君が高い所に登れば、私たちはヒヤヒヤして無理に下に降そうとしてきた。そうした、K君との抵抗の多い生活の中で、「一人一人を見つめること」という事が、ことば上の事で、実際には見つめていなかったのではないかと反省させられた。

そこで、まず、K君の気持ちに近づこうと、保育者の方からK



▲ 水遊びをしているK君

君に近づき、彼と一緒に楽しんでいこうという事になった。

やがて、K君は、友達や保育者とも遊ぶことができるようになってきた。二年目になって、K君とのかかわりも抵抗の少ないものになり、自然に受け入れられるようになってきた。園の行事にも参加できるようになってきて、全てが良い状態になってきたようだった。その事は、K君が子ども集団の中で、目立たなくなってきた事に通じる。そこからK君への見落しがでてきたのであるうか。

最近になって、一見、逆戻りに見えるような、K君の水を放出するという遊びがでてきた。以前にも、水で遊ぶという事があっ

だが、彼の気持ちに添おうという気持ちが強かったので、「わあきれいな水ね」「すごく遠くまでとんでいくよ」と言いながら、一緒に楽しんできた。

ところが、何でもできるようになったいま、何でもわかるようになってきたいま、K君の水遊びを、素直に受け入れられない気持ちが強くなってきた。水不足が叫ばれているおり、「水は大事なんだからね」と、K君の気持ちに関係なく、自分の気持ちで規制する事しかなかった。

以前には、K君の水遊びと一緒に楽しむ事ができたのに、という気持ちもあり、教師会では、水ではなく他のものだったら、私たちはどうしたであろう。水に替わる物は何だろうと話し合っている。

担任のN先生は、以前、認める事のできたK君の水遊びを、K君が前よりも成長してきた事で、又、K君の「水遊び」が、勢いよく放出させることであり、『水』というものの価値を考える事で、強い抵抗を感じているようである。それは、N先生に限らず、A幼稚園の先生方、みんなの共通の気持であるようだ。

K君の水遊びについて、A幼稚園のM先生は、「津守先生が、

小さい頃、どんな遊びでも、母親の目の届かない所で、許されて黙々と遊んでいたと言われた事が印象的です。

私も、子どもが、長い時間、自分のペースで、いろいろな遊びを遊んでもいいと思っています。

けれども、K君の水遊びはとも気になります。これが水でなかったら、気にならないのですが、私たちの中で「水」というものがそうさせるのでしょうか。K君に対しても、おうちのかげで遊んでいる。あの自由さを認めてあげたいという気がしているのですか……」と話された。

ここで、ゼミに参加された各幼稚園の先生でグループ討論が行なわれ、さまざまな意見や質問が出された。

まず、主な質問を取り上げてみよう。

○ K君の水遊びで、先生方は何が困ったのか。

○ まわりの子どもの反応はどうか。K君でなく他の子だったら

どうだったか。

○ K君が水で遊ぶとき、何が楽しいのだろうか。K君は水遊び以外、どんな遊びをしているのだろうか。

これらの質問を受けて、M先生は次のように答えられた。

「K君の水遊びに対して、何が困ったかと言えば、水を出して、

テラスをジャブジャブにする事が、素直に困った事です。

まわりの子ども達の反応は「自分もやりたい」と思う子がいたり、「ダメだよ」と注意する子もいます。又、一緒に遊んで遊ぶ子もいて、その時は「まあ、しかたがない」と思っています。

K君は水遊び以外には、動くものが好きです。絵の具を混ぜることも好きで、遊びは割合、片寄らないで遊んでいます。私たちはK君のことを、特別な子ではないという見方を必死にしているところです」

次に、主な意見を掲げると

○ K君に対して、先生方が持っている気配りが、他の子どもにも必要であることを、再認識させられた。

○ K君は、のびのび動いているように思える。やはり、一人一人の成長に即した考え方が必要ではないだろうか。

○ 子どもに基本的な事を教える時、大人の常識の上では、押える事が多くなってしまう。K君のように、身体で覚えるような子は、どのように身につけていけばいいのか考えなくてはいけない。

○ K君が水を激しく出して逃げていく時、そこに至る、蓄積の過程があるのではないか。そこを見落しているのではないか。

○ K君が水をビューンと放出しているのは、水を出しているのではなく、K君の何かの表出かもしれないと考えられる。

これらの意見の中には、新たな視点も出てきており、改めて、K君の事を考え直すことができるようである。

A幼稚園の先生方にとっては、U君とどう関わるか、K君とどう関わるかという具体的な問題であるが、この問題を、大人と子どもの出会いの基本にかかわる、共通の課題として、受けとめ、考えていけるようである。

子ども達が、非常にうまく遊び込み始め、保育者もいい感じになって、いい気持で三学期を過している。その中で、保育者にとって、安心を妨げる子が出てくるといふ事は、いい感じの生活の中でも、その子との出会いがうまくつかめていないのではないかという反省が、保育者の中には絶えず起ってくるという証になるのかもしれない。

こういった、子どもと保育者の出会いに関わる課題というのが、自由でのびやかな保育の中で、不断に問い直される課題ということになるのかもしれない。

(宇部短期大学)